

[63] アンジュラン・プレルジョカージュ考

～感受性と現代感覚～

2003年11月15日 東京新聞 夕刊

振付家アンジュラン・プレルジョカージュが作るバレエが時に暴力を感じさせることがあるとすれば、それは彼がとても傷つきやすい感受性を備えているからだ。

この十一月に新国立劇場が招聘したプレルジョカージュの二つのバレエ『ヘリコプター・カルテット』と『春の祭典』は、いずれもプレルジョカージュには珍しく暴力的なエネルギーを秀逸な身体表現に高めた舞台だった。

『ヘリコプター』の場合、その耐えがたい暴力性の源は音楽にある。シュトックハウゼンの『ヘリコプター・カルテット』はプロペラの轟音と、素人の耳には軋^{きし}みの連続としか聞こえない弦楽器のグリッサンド奏法の混合で、その音楽にダンサーの肉体を対決させるのが振付の出発点だったという。

床に仕組まれた照明が抜群のアイデアだ。流れる水のように見える光は、ダンサーのステップに反応して、まるで水そのもののように足を迂回し、小さな飛沫^{しぶき}を上げる。水に足を取られたダンサー

[63] アンジュラン・プレルジョカージュ考

～感受性と現代感覚～

2003年11月15日 東京新聞 夕刊

の動きは、波紋という足枷あしかせもしくは装飾によつてますます重みを増し、音楽の効果を倍加するのである。だが、それが単なる抵抗感だけで終わるかというところでもなく、頭上の音楽と足元の水にあらがいつづけているうちに、やがてふしぎな陶酔が生まれてくる。

いっぽう水の形状はつきつきに変化し、静水に大きな丸い波紋を描いたり、落差の低い階段状の滝に見えたりする。男女六人のダンサーは強靱な筋肉を駆使して水を飛び越え、あるいは横たわって身を浸し、二人ずつ、三人ずつ、入り組んだポーズを作っては、また解ほぐれる。六人がひとつになつて作った造形など、じつに斬新で面白かった。

各人がそれぞれ別々の形と動きをしつつ、全体で一つの大きな動く塊を作っていたのだ。

もう一つの『春の祭典』は、指揮者バレンボイムの要請を受けて作られたもの。

もともとのバレエは一九一三年、バレエ・リュスのためにストラヴィンスキーが作曲し、ニジンスキーが振り付けたのが初演である。その時

[63] アンジュラン・プレルジョカージュ考

～感受性と現代感覚～

2003年11月15日 東京新聞 夕刊

は初日から、客席が抗議のヤジと口笛で騒然となつたと伝えられるが、生命の蘇^{よみがえ}る春の儀式として、生贄^{いけにえ}Ⅱ女神のまわりで自らを鼓舞する祭りは、爆発的な生命エネルギーと性の衝動が主人公。挑発と恐怖そして官能が交錯して、忘我の熱狂へと否応なく高まっていく。音楽の魔力か、現在に至るまで新しい創作が引きも切らない。

プレルジョカージュの『春の祭典』は、冒頭、緑の丘に寝そべる男たちの前で、女たちがつぎつぎに下着を脱ぐ。六組の男女は、挑むかと思えば逃げまどい、争うように睦み合い、果ては一人の女を全裸にしての狂宴へと盛り上がった。

舞台奥に置かれた緑の丘が途中で分解し、移動して六つのベッドになり、最後に祭壇となる。目に鮮やかで気が利いている。

官能的で暴力的、少なからずスキャンダラスという点では原典のコンセプトに忠実だが、その現代感覚は鮮烈な印象を残した。

(7日、新国立劇場)